

# 数量詞遊離についての一考察

小 川 勉

## はじめに

日本語の数量詞遊離現象に対して、これまでさまざまな研究がなされてきた（井上（1978）、黒田（1980）、Miyagawa（1989）、Hamano（1989）、Naito（1995）、高見（1998、2001）、高見・久野（2002）などを参照）。

これらの研究で議論されてきた内容は、主に次の4点である。

- (1) a. どのような数量詞が遊離するのか。
- b. どのような名詞句（以下ホストNP）が数量詞遊離を許すのか。
- c. 遊離数量詞は、変形によって移動するのか、あるいは基底生成されるのか。
- d. 遊離可能な数量詞は、文中のどの位置に生じ得るのか。

本稿では、まず第1節で数量詞遊離現象を扱っている先行研究を概観する。次に第2節で機能的制約を提案し、第3節で機能的制約によるデータの説明を試み、その妥当性を検証する。そして最後に第4章で本稿のまとめを行なう。

## 1. 先行研究概観

### 1.1 英語の数量詞遊離

本節では、英語の数量詞現象に対して体系的な分析を提案している高見（1998）および高見（2001）の分析を概観する。

高見（2001）は、叙述という概念を用いて統語的に数量詞遊離の現象を分析

しているBowers (1993) とBaltin (1995) の研究を概観した後、それらの統語的分析にはいくつかの重要な問題があることを指摘し、同じく叙述という概念を用いながらも機能的分析のほうがより包括的であることを示している。<sup>1)</sup>

高見 (2001) は、数量詞遊離が果たす機能を以下のようなものであると考えている。

(2) a. [All [of the students]] came to the party.

b. The students all came to the party.

(3) a. [Each [of the guests]] will make a speech.

b. The guests will each make a speech.

(2a), (3a) において話し手が主語の一部をなす数量詞, *all*, *each*を, (2b), (3b) のように文中の他の位置へ移す理由は, (i)主語 (や目的語) の指示物の数 (や量) を強調し, (ii)数量詞が, 主語 (や目的語) を修飾するという機能から, 主語 (や目的語) を叙述する要素を修飾するという機能に転換するためであると考えられる。

そして, 例えば (2a) と (2b) の構造を次のように仮定し, そこでは「VP 内主語仮説 (VP-internal subject hypothesis)」に基づく派生を想定するのではなく, 主語の *the student* は元から IP (=S) の指定部に生成し, 遊離した *all* は上位の VP 指定部に元から生成すると考えている。<sup>2)</sup>

(4) a. (= (2a))

[<sub>S</sub> [<sub>NP</sub> all of the students] [<sub>VP</sub> [<sub>V</sub> came] [<sub>PP</sub> to the party]]]

b. (= (2b))

[<sub>S</sub> [<sub>NP</sub> the students] [<sub>VP1</sub> all [<sub>VP2</sub> [<sub>V</sub> came] [<sub>PP</sub> to the party]]]]]

高見 (2001) はさらに, (4b) の構造において重要な点は, *all* が *came to the party* を修飾するだけでなく, *the students* を意味的に受けて, 動詞句 *came to the party* の (二次的) 主語として機能しているという点であり, 数量詞が遊離した文においては, 次に示すように, 二重の主述関係が成立していると主張している。

(5) The students all [came to the party].

[the students] 一次的主述関係 [came to the party]

[all] 二次的主述関係 [came to the party]

高見 (2001) は数量詞遊離に対し、以上の骨格となる特徴を概観した後、数量詞遊離現象が示すさまざまなふるまいを観察している。

まず、数量詞遊離は、二次的な主語として機能するために、その後ろには遊離数量詞を主語として叙述する要素が提示されなければならない。<sup>3)</sup>

(6) a. The guests have all arrived.

b. \*The guests have arrived all.

(7) a. His parents were both invited to the party.

b. \*His parents were invited to the party both.

(6a) では、「(客の) 全員が」という二次的な数量詞主語 *all* に対して、「到着した」という叙述がなされ、主述関係が成立しているので適格となる。一方 (6b) では、「全員」という二次的な数量詞主語 *all* が、文末に「置き去り」にされ、叙述要素が続いていないので不適格となる。(7a), (7b) も同様な理由からそれぞれの適格性が予測される。

以上は、数量詞が主語要素から遊離するデータであったが、高見 (2001) は数量詞が主語以外の要素から遊離するデータについても考察している。

#### S V O C (小節 (small clause)) 構文

(8) a. John called the two men both liars.

b. Mary put his letters all on her desk.

(9) a. John found the books all interesting.

b. \*John found the books all quickly.

(10) a. John looked at the men all lying on the grass.

b. \*John argued with the men all about linguistics.

#### S V O O (二重目的語構文)

(11) a. I gave the girls both handkerchiefs.

b. John promised the girls each a diamond ring.

以上の考察から、高見 (2001) は次の仮説を立てている。<sup>4)</sup>

- (12) 数量詞遊離に課される機能的制約 (2001: 48 (43)) : 遊離数量詞は、(二次的) 主語として機能するため、後続要素によって叙述されなければならない。

この機能論的制約の関係および制約の妥当性については、1.3節において検討する。

## 1.2 日本語の数量詞遊離

高見は(2001)は、Miyagawa (1989)が提案している相互c統御条件のような統語論的制約によっては説明できない数量詞遊離現象があることを明らかにし、さらに高見・久野(2002)では、相互c統御条件の理念を組み入れた非対格性制約では説明できない数量詞遊離現象があることを明らかにしている。そして代案として、ホスト名詞句が数量詞遊離を許すために備えるべき条件(高見(2001))および遊離数量詞の文中での位置についての機能論的な制約(高見(2001), 高見・久野(2002))を提案し、数量詞遊離現象を包括的に捉えることができることを示すことによりその妥当性を主張している。

### 1.2.1 数量詞遊離に課される機能論的制約

本節では、数量詞遊離に課される機能論的制約について論じている高見(2001)の分析を概観する。<sup>5)</sup>

高見(2001)は、主語や直接目的語が数量詞遊離を許すのに対し、「ニ」格名詞句や付加部内の名詞句は、数量詞遊離を許す場合と許さない場合があることを観察し、このような事実と主題化(thematization)現象とが平行関係にあることを指摘し、どのような名詞句が数量詞遊離を許すかという問題が、主題化という概念によって一律に説明できることを提案している。

まず、以下の主題化された文(13)の適格性は、数量詞遊離の適格性(14)と一致していると述べている。

- (13) a. その子供は、折り紙で鶴を折った。(主語)  
 b. その鶴は、太郎が折り紙で折った。(目的語)

- c. \*その折り紙は、太郎が鶴を折った。(道具／手段)
- (14) a. 子供が3人、折り紙で鶴を折った。(主語)  
b. 太郎が、折り紙で鶴を3羽折った。(目的語)  
c. \*太郎が折り紙で3枚、鶴を折った。(道具／手段)

ここでは、(14a-c) が示すように、主語や目的語が数量詞遊離を許すのに対し、道具／手段を表わす名詞句は数量詞遊離を許されていない。

また、井上 (1978 : 174) が「副目的格」と呼ぶ名詞句は、次に示すように、主題化も数量詞遊離も許す。

- (15) a. その団体客を泊める宿屋は、私が当たってみた。  
b. 私は、団体客を泊める宿屋に2、3軒当たってみた。

さらに、着点を表わす「ニ」格名詞句も、主題化と数量詞遊離を許す。

- (16) a. その地元の企業は、会社訪問で先週行ってきた。  
b. 会社訪問で、先週、地元の企業に2つ行ってきた。

一方、格助詞「ト」でマークされる随伴を表わす付加部は、主題化も数量詞遊離も許さない。

- (17) a. \*そのクラスメートは、太郎がボーリングに行った。  
b. \*太郎がクラスメートと3人、ボーリングに行った。

さらに、間接目的語の場合も主題化も数量詞遊離も許さない。

- (18) a. \*その英語の先生は、太郎が花子を紹介した。  
b. \*太郎が花子を英語の先生に3人紹介した。

以上から、高見 (2001) は主題化を許す名詞句は数量詞遊離も許し、逆に主題化を許さない名詞句は数量詞遊離も許さないと結論付け、数量詞遊離に関して次の仮説を提案している。<sup>6), 7)</sup>

- (19) 数量詞遊離に課される機能論的制約 (2001: 136 (64)) : 文中のある名詞句が、その文の主題として機能することができる場合にのみ、その名詞句は数量詞遊離を許す。

### 1.2.2 遊離数量詞に課される機能論的制約

本節では、遊離数量詞に課される機能論的制約について論じている高見(2001)、高見・久野(2002)の分析のうち主に高見・久野(2002)の分析を概観する。

高見・久野(2002)は、遊離数量詞のふるまいを考察する際には、久野(1978: 60)が提案している日本語の文の情報構造が決定的な要因となるという立場に立ち論を進めている。

- (20) 日本語の文の情報構造：日本語は、通例、動詞の位置が文末に固定されているので、動詞が旧情報を表わす場合は、その直前の位置が文中の最も新しい情報(=焦点、最も重要な情報)を表わす要素のための予約席となる。

高見・久野(2002)は、上記の情報構造を踏まえて数量詞遊離現象に説明を与えている。

まず、次の他動詞が用いられ、遊離数量詞が述部の中に現れている文については以下の説明を与えている。

- (21) a. 学生がそれを／その本を4人買った。  
b. ?\*学生が本を4人買った。

(21a)は、何人の学生がそれ(その本)を買ったかに関する記述として解釈される。なぜなら、(i)数量詞「4人」がこの文で初めて提示され、動詞の直前に置かれているために、この数量詞が聞き手にとって最も重要度の高い情報(焦点)を伝達し、(ii)目的語の「それ／その本」は、先行文脈ですでに導入されており、重要度の低い情報を伝達するためである。

例文(21)の適格性に関する説明は、(22)の説明にも当てはまる。

- (22) A: この新刊雑誌、売れていますか?

B: ええ、今朝も学生さんがそれを5人買って行きましたよ。

(22B)の目的語は「それ」という代名詞であるため、この文は、何人の学生がそれ(「この新刊雑誌」)を買ったかに関する記述として解釈される。よって、この文は適格となる。

また、次の文の適格性も情報の重要度の違いを利用し説明することができる  
と述べている。

- (23) a. 灘高の生徒は、毎年東大を80人以上受験する。  
b. 僕はアパート住まいだけど、最近同僚が家を4, 5人次々と建て  
ました。

さらに、数量詞に強調の副詞が付いた場合も検討し、これらのデータも情報  
の重要度の違いを利用することにより説明できると論じている。

- (24) a. 学生がレポートを3人だけ提出した。  
b. 学生が僕の授業を途中で5人もやめました。  
c. 学生が私の本を2人しか買わなかった。  
d. わが子が故郷を3人とも出て行ってしまった。

(24)では、数量詞にそれぞれ強調を表わす副詞が付くことにより、それらが重要  
度の高い情報と認識されると同時に、動詞の直前に置かれることにより、それ  
らが表わす情報がそれぞれの文中で最も高い情報と解釈され、日本語の文の情  
報構造を満たし、適格となる。

高見・久野(2002)は、次に非能格動詞が用いられた文の適格性も情報の重  
要度の違いを利用して説明できると論じている。

- (25) a. ?\*学生が自分の金で2人電話した。  
b. \*子供がゲラゲラと2人笑った。  
(26) a. 学生が教室で4人暴れ回っていた。  
b. 子供が舞台上で10人踊った／踊っていた。

(25a, b) と (26a, b) の適格性の違いは、用いられている副詞(句)に原因  
がある。(25a, b) の「自分の金で」、「ゲラゲラと」が、手段や様態を表わす  
のに対し、(26a, b) の「教室で」、「舞台上」は、場所を表わしている。前者  
のような副詞句は、主題(つまり旧情報)として機能せず、重要度の高い情報  
(新情報)を表わすのに対し、場所や時を表わす副詞句は、主題(および場面  
設定(scene-setting))として機能し、重要度の低い情報(旧情報)を表わす。

さらに、高見・久野(2002)は非対格動詞の場合にも、その適格性は情報の

重要度の違いを用いて説明することができることを示している。

- (27) a. ?\*生徒がこの階段で突然 5 人転んだ。  
 b. ?\*兵士がこの戦場でバタバタと 8 人倒れた。
- (28) a. 生徒がこの階段で 5 人転んだ。  
 b. 兵士がこの戦場でそのとき 8 人倒れた。

(27a, b) では、場所（および時）を表わす副詞句に加え、様態を表わす副詞「突然」、「バタバタと」が用いられている。それゆえ、数量詞だけでなく、これらの様態を表わす副詞も重要度の高い情報として解釈される。したがって、これらの文は、次のような多重疑問文の答えとして解釈されるが、このような質問は、普通の言語使用では用いられることがなく、きわめて不自然である。

- (29) a. ?\*生徒が、この階段でどのように何人転んだの？  
 b. ?\*兵士が、この戦場でそのときどのように何人倒れたの？

一方、(28a, b) では、場所を表わす副詞句のみが用いられているため、動詞直前の数量詞が最も重要度の高い情報として解釈される。そのため、(28a) は、何人の学生がこの階段で転んだかに関する記述として解釈され、(28b) は、何人の兵士がこの戦場で倒れたかに関する記述として解釈される。よって、これらの文は、日本語の文の情報構造(20)を満たして、適格となる。

高見・久野（2002）は、適格性が非対格動詞と非能格動詞の区別に依存するというこれまでの主張が、間違いであることを明らかにし、これらの構文の適格性を決定付けている要因を考察し、それぞれの構文に対して次の制約を提示している。<sup>8)</sup>

- (30) 数量詞遊離に課される機能的制約（2002: 420（55））：数量詞遊離は、日本語の文の情報構造—文中の要素は重要度の低い旧情報から重要度の高い新情報へと配列され、動詞の直前に最も重要度の高い情報が置かれる—を遵守する形で行なわれなければならない。

### 1.3 高見の機能論的制約

#### 1.3.1 数量詞遊離に課される制約と遊離数量詞に課される制約



本節では、高見および高見・久野によって英語および日本語の数量詞遊離現象を説明するために提案されている機能論的制約を整理する。

まず、英語の数量詞遊離現象に対しては、次の制約が提案されている。

- (12) 数量詞遊離に課される機能的制約：遊離数量詞は、(二次的)主語として機能するため、後続要素によって叙述されなければならない。

次に日本語の数量詞遊離現象に対しては、次の機能論的制約が提案されている。

- (19) 数量詞遊離に課される機能論的制約：文中のある名詞句が、その文の主題として機能することができる場合にのみ、その名詞句は数量詞遊離を許す。

そして、日本語の遊離数量詞のふるまいについては、次の制約が提案されている。

- (30) 遊離数量詞に課される機能論的制約：遊離数量詞は、日本語の文の情報構造—文中の要素は重要度の低い旧情報から重要度の高い新情報へと配列され、動詞の直前に最も重要度の高い情報が置かれる—を遵守する形で行われなければならない。

### 1.3.2 機能論的制約が抱える問題点

本節では、高見による、数量詞遊離現象を機能論的制約により説明する分析に対し、以下の3つの問題点があることを指摘する。

第1の問題点は、数量詞がホストNPから遊離して文中の離れた場所に出現するという現象が、英語および日本語に等しく観察されるにもかかわらず、その振る舞いを説明するための機能論的制約として、高見および高見・久野は英語の数量詞遊離と日本語の数量詞遊離に対してそれぞれ異なった制約を提案している点である。そして両者の間の関係についてはなんら言及していない。言い換えると、同じ数量詞遊離という現象を扱いながら、英語の現象と日本語の現象に対しそれぞれ異なる(重なる部分(叙述関係を利用)はあるが)機能論的制約を仮定するという余剰的な議論を行っている点が問題であると指

摘できる。

第2の問題点は、英語の数量詞遊離現象に対しては、数量詞遊離に課される機能論的制約を提案しているのみであるが、日本語の数量詞遊離現象に対しては、数量詞遊離に課される機能論的制約に加え、遊離数量詞に課される機能論的制約を仮定している点である。2つの言語の間に制約の性質についての平行性が認められない。言い換えると、制約の性質に非対称性が見られることが問題である。

第3の問題点は、数量詞遊離現象に対しては、多くの研究者がさまざまな提案を行ってきているが、先行研究ではその視点が完全に抜け落ち、なんら説明がなされてこなかった問題が存在するという点である。

それは、ホストNPと遊離した名詞句との関係である。先行研究においては、この両者に（何らかの）関係に気づいてはいてもそれについての認識はみられない。先行研究では、この点に関しての言及がないので、あえて推測すると、以下のようなと思われる。

数量詞遊離は変形操作によるという立場では、ホストNPと遊離する数量詞は、派生の前段階で一つの有意味なまとまり（構成素）を成しているので、派生操作の適用後も、ホストNPと遊離数量詞の間にひとつの構成素を成していた時に持っていた関係が保持されると想定されている。

また、数量詞遊離は変形操作によるものではなく、遊離した数量詞はもともとその位置に出現するという立場においても、ホストNPと遊離した数量詞は何らかのつながり（例えば、有意味なまとまり（構成素））を持つと想定されている。

次節では、その存在が想定されていてもその実態についてなんら言及されてこなかった問題、ホストNPと遊離した数量詞との関係について議論し、上述の問題すべてを解決するために英語および日本語の数量詞遊離現象に対し機能論的制約を提案し、英語および日本語に見られる数量詞遊離の現象を統一的に説明し、制約の妥当性を検証する。

## 2. 提案

### 2.1 第3の問題について

数量詞がホストNPから遊離し文中の他の位置に出現することの意味について考察する。

高見（1998）は久野による文の情報構造の原則を踏襲し、次の原則を提案している。

- (31) 情報の流れの原則（1998: 192（96））：強調のための強勢や形態的にマークされた焦点要素を含まない文中の要素は、通例、より重要でない情報からより重要な情報へと配列される。

そして、英語と日本語の文の情報構造として次の構造を仮定している（1998: 164（80））。

- (32) a. 英語： [S      V | O]

—————→

より重要度が高い

- b. 日本語： [S      O | V]

—————→

より重要度が高い

上述の情報の流れの原則から、数量詞は文を成す連鎖においてホストNPから離れてその右側に独立して出現するということが持つ意味は、遊離した数量詞が新たに独立してより重要な情報を担うことにあると言える。

以上要約すると、遊離した数量詞は、遊離することによりホスト名詞句が持つ情報と同じ重要な情報を担うことになるといえる。一方、ホスト名詞句は遊離した数量詞と有意味なまとまりを成すという点において、情動的に重要であるといえる。<sup>9)</sup>

ここで、情動的に強調されており重要であることを示すしくみとして、[+E (mphasized) I (nformation)]という素性を仮定する。情動的な重要度の軽重についても検討すべき課題ではあるが、稿を改めて議論した。

ホストNPと遊離した数量詞が[+EI]という素性を持つ場合、次の構造を持つと考える。

- (33) [NP . . . QP . . . ]  
 [+EI]      [+EI]  
 ホスト      遊離した数量詞

また、ホストNPと遊離した数量詞が一つの有意味なまとまり（構成素）を成しているので、その両者を関係付けるためのしくみが必要である。

- (34) [(QP<sub>i</sub>+) NP<sub>i</sub> . . . QP<sub>i</sub> (+NP<sub>i</sub>) . . . ]  
 ホスト      遊離した数量詞

ホストNPと遊離した数量詞はそれぞれ遊離した数量詞とホストNPのコピーを持ち、そして、ホストNP本体と遊離した数量詞本体は同一指標によりそれぞれのコピーと関係付けられると仮定する。ホストNPは同じ[+EI]という素性を持つ要素を探索し、遊離数量詞は同じ[+EI]という素性を持つ要素を探索し、お互いに同じ指標をもつ場合はホストNPと遊離数量詞が持つ有意味なまとまりが保障されると考える。<sup>10)</sup>

上記で提案した2つのしくみをまとめると、次のような情報構造になる。

- (35) [(QP<sub>i</sub>+) NP<sub>i</sub> . . . QP<sub>i</sub> (+NP<sub>i</sub>) . . . ]  
 [+EI]      [+EI]  
 ホスト      遊離した数量詞

そして、情報構造においてホスト名詞句および遊離数量詞とそれぞれのコピーとの関係を規定するために、次のような原則を提案する。

- (36) 情報構造における原則：ホスト名詞句と遊離数量詞は情報構造においてお互いのコピーを探索し、確定しなければならない。

## 2.2 第1および第2の問題点について

英語および日本語の数量詞遊離に対して、以下の機能論的制約を仮定する。

- (37) 数量詞遊離に課される機能論的制約：数量詞遊離は、以下の条件をすべて満たす場合のみ許される。

- (a) 遊離数量詞を許す名詞句は、文中の要素により叙述され得る名詞句のみであり、
- (b) 遊離数量詞は、名詞句として機能するためには、文中の他の要素に対し何らかの意味役割を持たなければならない。
- (c) ホスト名詞句と遊離数量詞は、情報構造における原則(36)を守らなければならない。

### 3. 提案による説明

本節では、(37)で仮定した制約および原則を用いて現在まで説明されているデータを適格に説明できることを論じる。

#### 3.1 英語の数量詞遊離

まず、英語の数量詞遊離について。

(38) The students all came to the party.

(39) The guests will each make a speech.

(38)が先に提案した数量詞遊離に課される機能論的制約に従うかどうかをみる。

まず、条件(a)を満たしているか検討する。(38)は次の叙述関係を持っている。

(40) the students all came to the party

(40)において、*the students*は、文中の要素*all*により叙述されているので、条件(a)は満たされている。次に、条件(b)について検討する。遊離数量詞*all*は、*came to the party*に対し、「主題(theme)」という意味役割を担っているので、条件(b)も満たされることになる。最後に、条件(c)について検討する。(38)は次の情報構造を持っていると仮定される。

(41) ([all]<sub>i</sub>+) [The students]<sub>i</sub> [all]<sub>i</sub> (+[the students]<sub>i</sub>) came to  
   [+EI]  [+EI]

the party.



素から、同じ指標を持つコピー ( $[the\ students]_i$ ) を探査し、遊離数量詞 *all* は同じ素性 [+EI] を持つ要素から、同じ指標を持つコピー ( $[all]_i$ ) を探査し、確定することができるので条件(c)を満たすことができる。従って、(42b) は数量詞遊離に課される機能論的制約のすべての条件を満たすことができないので、適格ではないと予測される。

数量詞として *all* の代わりに *both* を持つ(44)に関しても上記と同じ説明を与えることができるので省略する。

これまで考察してきた例は、数量詞が主語から遊離する場合であったが、数量詞は主語以外の要素からも遊離可能である。次の例を見てみよう。数量詞遊離に課される機能論的制約の3つの条件のうち、(a)と(c)は満たされている。問題は、遊離数量詞が名詞句として機能するための意味役割を持っているかどうかである。

適格な文においては、遊離数量詞はすべて文中の要素に対し「主題 (theme)」の意味役割を持っているが、適格ではない文においては、遊離数量詞が文中の要素に対して意味役割を持っていない。

- (47) a. John called the two men both liars.  
 b. Mary put his letters all on her desk.
- (48) a. \*The teacher scolded the students all.  
 b. \*Mike discussed the problem with his employees all.
- (49) a. \*John ran after the thieves both by bicycle.  
 b. \*Ann cut the cakes all with a sharp knife.
- (50) a. \*John found the books all quickly.  
 b. John found the books all interesting.
- (51) a. \*John argued with the men all about linguistics.  
 b. John looked at the men all lying on the grass.

次のような二重目的語構文における数量詞遊離も捉えられると考えられる。

- (52) a. I gave the girls both handkerchiefs.  
 b. John promised the girls each a diamond ring.

従って、数量詞が主語以外の要素から遊離している他動詞文(47-52)における適格性も、先に提案した機能論的制約(37)により正しく予測されると論ずることができる。

### 3.2 日本語の数量詞遊離

3.1節において、数量詞遊離の機能論的制約(37)が英語の数量詞遊離現象を正しく捉えることができることを見たが、本節では、同制約が日本語の数量詞遊離現象にも有効であるかを検討する。

日本語の数量詞遊離現象に関しては、高見・久野(2002)においてその制約の妥当性を検証するために用いられているデータを、本稿で提案している枠組みで理論上、より体系的に説明することができることを示す。

まず、(53)が先に提案した数量詞遊離に課される機能論的制約に従うかどうかを見てみる。

- (53) a. 学生がそれを/その本を4人買った。  
 b. ?\*学生が本を4人買った。

適格な文(53a)から検討する。制約の条件(a)を満たしているかを検討すると、(53a)は次の叙述関係を持っている。

- (54) 学生が それを/その本を 4人 買った。

(54)において、「学生」は、文中の要素「4人」により叙述されているので、条件(a)は満たされている。次に、条件(b)について検討する。遊離数量詞「4人」は、「買った」に対し、「主題 (theme)」という意味役割を担っているので、条件(b)も満たされることになる。最後に、条件(c)について検討する。(53a)は次の情報構造を持っていると仮定される。

- (55) ([4人]<sub>i</sub>)+ [学生]<sub>i</sub> が その本を [4人]<sub>i</sub> (+[学生]<sub>i</sub>) 買った。  
 [+EI] [+EI]

この情報構造において、ホスト名詞句[学生]<sub>i</sub>は同じ素性 [+EI] を持つ要素から、同じ指標を持つコピー ([学生]<sub>i</sub>)を探索し、遊離数量詞[4人]<sub>i</sub>は同じ素性 [+EI] を持つ要素から、同じ指標を持つコピー ([4人]<sub>i</sub>)を探索し、



確定することができるので条件(c)も満たすことができる。従って、(53a)は数量詞遊離に課される機能論的制約に従うので、適格であると予測される。

次に不適格な(53b)について検討する。

(53) b. ?\*学生が本を4人買った。

(53a)と(53b)の違いは、「買う」の目的語が(a)では「その本を」であるのに対し、(b)では「本を」である。この違いは重要な意味を持っている。その他の点においては、平行性を保っている。(b)においては、目的語の「本を」が不定名詞句であるため、重要度の高い情報として解釈される。本稿の枠組みでは、(b)の「本を」が強調された情報であることを示す[+EI]という素性を持つと仮定する。遊離数量詞に課される機能論的制約による説明を試みる。

まず、制約の条件(a)を満たしているかを検討すると、(53b)は次の叙述関係を持っている。

(56) 学生が 本を 4人 買った。

(56)において、「学生」は、文中の要素「4人」により叙述されているので、条件(a)は満たされている。次に、条件(b)について検討する。遊離数量詞「4人」は、「買った」に対し、「主題(theme)」という意味役割を担っているので、条件(b)も満たされることになる。最後に、条件(c)について検討する。(53b)は次の情報構造を持っていると仮定される。

(57) ([4人]<sub>i</sub>+) [学生]<sub>i</sub> が 本を [4人]<sub>i</sub> (+[学生]<sub>i</sub>) 買った。  
[+EI] [+EI] [+EI]

この情報構造において、ホスト名詞句[学生]は同じ素性[+EI]を持つ要素から、同じ指標を持つコピー([学生]<sub>i</sub>)を探索し、遊離数量詞[4人]は同じ素性[+EI]を持つ要素から、同じ指標を持つコピー([4人]<sub>i</sub>)を探索する必要があるが、両者の間には、両者の同じ素性[+EI]を持つ要素「本を」が介在している。この「本を」をという要素がホスト名詞句と遊離数量詞がお互いのコピーを捜査するための障壁(barrier)として機能するために、両者の有意味な一体化が阻止され、その結果この文は不適格と予測されることになる。

このしくみについては、暫定的に局所化の原則による説明を行なう。すなわち、(57)において、[学生]<sub>i</sub>がそのコピー（[学生]<sub>i</sub>）を探查する場合に、まず視野に入るのが [学生]<sub>i</sub> がもつ素性 [+EI] と同じ素性を持つ「本を」である。しかしながら、この両者は同一の指標（この場合は *i*）を持っていないので、コピーの探查は不成功に終わり、この文は適格ではないと予測される。

視点を変えると、同一素性を持つ要素が見つかったということで、[学生]<sub>i</sub> によるそのコピーの探查は、ここで終了してしまい、本来の目的である、[学生]<sub>i</sub> とそのコピーである（[学生]<sub>i</sub>）との有意味な関係を築くことができず、コピー（[学生]<sub>i</sub>）が不安定な状態のまま残ることになり、結果としてこの文が適格でないことが予測される。

次に、高見が c 統御や非対格制約といった構造的な制約では説明がつかず、代案として機能的な制約をする原因となったデータに対し、本稿で提案している機能論的制約の有効性を論ずる。

(58) A：この新刊雑誌，売れてますか。

B：ええ，今朝も学生さんがそれを5人買っていきましたよ。

(59) a. 灘高校の生徒は，毎年東大を80人以上受験する。

b. 僕はアパート住まいだけど，最近同僚が家を4，5人次々と建てました。

この場合も、目的語「それを」, 「東大を」, 「家を」は重要度の低い情報として解釈されるため、これらの目的語が強調されていることを表わす [+EI] という素性を持つことはない。従って、ホスト名詞句と遊離数量詞を関係付ける際に、なんら障壁は存在しないことになる。

(60) a. 学生がレポートを3人だけ提出した。

b. 学生が僕の授業を途中で5人もやめました。

c. 学生が私の本を2人しか買わなかった。

d. 我が子が故郷を3人とも出て行ってしまった。

(60a) では、目的語が「レポート」という不定名詞句であり、重要な情報として解釈される。しかし、数量詞「3人」に「だけ」という強調を表わす副詞

がつくことにより、「3人だけ」の方がより重要度の高い情報となる。従って、強調を表わす素性 [+EI] は、「3人だけ」が持ち、「レポートを」は持たないと考える。HOST名詞句「学生が」と遊離数量詞「3人(だけ)」を関係付ける際に、なんら障壁は存在しないことになる。

以上の例は、すべて他動詞構文であり例文(53)と構造的に平行関係にあるので、機能論的制約の条件(a)と(b)を満たすと予測されるので、具体的な検証を省略する。

次に、非能格動詞が用いられた次の文を見てみよう。

- (61) a. ?学生が自分の金で2人電話した。  
 b. \*子供がゲラゲラと2人笑った。
- (62) a. 学生が教室で4人暴れ回っていた。  
 b. 同僚が山田君の提案に5人賛成した。  
 c. 去年1年で50代以上の夫婦が、何らかの理由で100組以上離婚した。  
 d. 子供が海で2人泳いでいた。  
 e. 子供が舞台上で10人踊った／踊っていた。

ここでは、すでに見たように高見・久野(2002)において次の説明が与えられている。(61)の副詞は、手段や様態を表わすのに対し、(62)の副詞は場所を表わしている。前者のような副詞は主題(つまり旧情報)として機能しないので、重要な情報(新情報)を表わすのに対し、場所や時を表わす副詞は、主題および場面設定(scene-setting)として機能するため、重要ではない情報(旧情報)を表わしている。

この情報の重要度の違いを、強調の素性 [+EI] の付与の違いに還元すると、適格な文においては、HOST名詞句と遊離数量詞との間にその関係付けを妨げるような障壁はなんら存在していないのに対し、不適格な文においては、HOST名詞句と遊離数量詞と間には、強調の素性 [+EI] を持つ要素「自分の金で」、「ゲラゲラと」がそれぞれ介在し、障壁となっている。

次に、制約の条件(a)を満たしているかどうかを検討すると、(62a)は次の

叙述関係を持っている。

(63) 学生が教室で4人暴れ回っていた。

(63)において、「学生」は、文中の要素「4人」により叙述されているので、条件(a)は満たされている。次に、条件(b)について検討する。遊離数量詞「4人」は、「暴れ回っていた」に対し、「動作主 (agent)」という意味役割を担っているので、条件(b)も満たされることになる。

また、非対格動詞の場合にも、同様な説明が当てはまる。

- (64) a. 生徒がこの階段で3人転んだ。  
b. 交通事故がこの交差点で3件起きた。  
c. 兵士がこの戦場で7人倒れた。

- (65) a. ?\*生徒がこの階段で突然3人転んだ。  
b. ?\*交通事故がこの交差点で不注意が原因で3件起きた。  
c. ?\*兵士がこの戦場でバタバタと7人倒れた。

(64)と(65)の違いは、後者が場所を表わす副詞に加え、様態や理由を表わす副詞を含んでいるのに対し、前者は場所を表わす副詞のみを含んでいる点である。先に見たように、様態や理由を表わす副詞は、重要な情報(新情報)を表わしている。

この情報の重要度の違いを、強調の素性 [+EI] の付与の違いに還元すると、適格な文においては、ホスト名詞句と遊離数量詞との間にその関係付けを妨げるような障壁はなんら存在していないのに対し、不適格な文においては、ホスト名詞句と遊離数量詞と間には、強調の素性 [+EI] を持つ要素「突然」、「不注意が原因で」、「バタバタと」がそれぞれ介在し、障壁となっている。

次に、制約の条件(a)を満たしているかどうかを検討すると、(64a)は次の叙述関係を持っている。

(66) 生徒がこの階段で3人転んだ。

(66)において、「生徒」は、文中の要素「3人」により叙述されているので、条件(a)は満たされている。

次に、条件(b)について検討する。遊離数量詞「3人」は、「転んだ」に対し、

「主題／経験主 (theme/experiencer)」という意味役割を担っているので、条件(b)も満たされることになる。

以上、非能格動詞の場合も非対格動詞の場合も数量詞遊離に課される機能論的制約のすべての条件を満たしているので、適格であると予測される。

#### 4. まとめ

本稿では、数量詞遊離現象を扱っている先行研究（生成統語論および機能統語論）を概観し、生成統語論の分析に代案を提案している高見および高見・久野の機能的制約が抱える問題を指摘し、その同じ機能的枠組みをとりながら、より包括的に数量詞遊離現象を扱うための代案を提案した。その代案の持つ意義は、(i)従来の分析ではまったく考慮されてこなかった関係、すなわち、ホスト名詞句と遊離数量詞との有意義な一体化を仮定し、その関係を規定した。(ii)従来の分析では、英語の数量詞遊離現象と日本語の数量詞遊離現象に対し、(基本的な「叙述」という概念は共有しているが)独立した制約が提案されてきたが、本稿では、両言語における数量詞遊離現象を統一的制約によって説明している点の2点にあると考える。

#### 注

- 1) Bowers (1993) およびBaltin (1995) の分析および高見 (2001) が指摘している問題点について本稿で論ずる事はしないので、それぞれの文献を参照されたい。
- 2) 本稿においても、遊離した数量詞は移動によるものではなく、出現する位置に元から生成するという立場をとる。
- 3) 以下の例文における下線が付与されている2つの要素は、両者が叙述関係にあることを示す。
- 4) 高見 (2001) の前段階として、高見 (1998) は、英語の数量詞遊離現象を検討し、数量詞遊離に課される機能論的制約を提案しているが、ここでは、より包括的な制約

- である高見（2001）を検討する。
- 5) Miyagawa (1989) の分析および高見による問題の指摘については、本稿では述べることはしないので、それぞれの文献を参照されたい。
- 6) 高見（2001）は、道具／手段、場所、随伴を表わす付加部と異なり、格助詞「カラ」でマークされる起点を表わす付加部は、主題化と数量詞遊離を許す場合と許さない場合があることも論じている。
- (i) a. 学生は、3000円ずつ集めて下さい。  
b. 学生から20名以上、お金を集めて下さい。
- (ii) a. \*その訪問先の国は、閣僚が戻ってきた。  
b. \*閣僚が、訪問先の国から3つ戻ってきた。
- 7) 高見（2001）の前段階として、高見（1998）は、英語の数量詞遊離現象を検討し、機能論的制約を提案しているが、ここでは、より包括的な制約である高見（2001）を検討する。
- 8) 高見・久野（2002）の前段階として、高見（2001）は、英語の数量詞遊離現象を検討し、機能論的制約を提案しているが、ここでは、より包括的な制約である高見・久野（2002）を検討する。
- 9) 1.1節で観察した数量詞遊離が持つ強調という概念を発展させたものである。
- 10) ここでの議論は、生成文法におけるコピー理論を援用したものである。

### 参考文献

- Baltin, M. R. (1995) "Floating Quantifiers, PRO, and Predication," *Linguistic Inquiry* 26, 199-248.
- Bowers, J. (1993) "The Syntax of Predication," *Linguistic Inquiry* 24, 591-656.
- Hamano, S. (1989) "On Japanese Quantifier Floating." *LSA*, 1-8.
- 井上和子 (1978) 『日本語の文法規則』. 東京：大修館書店.
- Kang, B.-M. (2002) "Categories and Meanings of Korean Floating Quantifiers — With Some Reference to Japanese," *Journal of East Asian Linguistics* 11.4, 375-

398.

久野 暉 (1978) 『談話の文法』. 東京：大修館書店.

Kuno, S. and K. Takami (1993) *Grammar and Discourse Principles*. Chicago: University of Chicago Press.

黒田茂幸 (1980) 「文構造の比較」. 國廣哲弥 (編) 『日英語比較講座 第2巻』 23-61. 東京：大修館書店.

Miyagawa, S. (1989) *Structure and Case Marking in Japanese*. New York: Academic Press.

Naito, S. (1995) “Quantifier Floating.” 高見健一 (編) 『日英語の右方移動構文』 199-225. 東京：ひつじ書房.

高見健一 (1998) 「数量詞遊離」. 神尾昭雄・高見健一 『談話と情報構造』 165-196. 東京：研究社。

高見健一 (2001) 『日英語の機能的構文分析』. 東京：鳳書房.

高見健一・久野 暉 (2002) 『日英語の自動詞構文』. 東京：研究社.